

第15回彗星会議

長谷川 一郎*

今年の彗星会議は、3月23・24日の両日、仙台市天文台を会場として開催された。仙台での開催は第6回(1976年)の彗星会議以来9年ぶりのことであった。彗星会議というのは、わが国のアマチュア天文家で、特に彗星に関心をもっている人々と、彗星天文学の分野の専門家達が一堂に会して、情報交換や研究討論を行う場を提供するものである。第1回の会合は1971年に行われ、その後毎年、原則として3月に開催されており、今回で15回を数えるに至った。会場は毎年各地の天文同好会や有志の人々によって準備され、運営されている。そしてできるだけ日本国内を広くまわるように計画されていて、今までに、仙台、宇都宮、東京、静岡、浜松、御園(愛知)、蒲郡、神戸、和歌山、岡山、高知、及び福岡の各地で開かれた。彗星会議に集る人の中には、既にいくつも彗星の独立発見に成功しているベテランや、これから彗星の観測を始める新進など、老若男女、かなりバラエティに富んでいる。

今回の会議は、来るべきハレー彗星をむかえて、特に国際ハレー彗星観測(IHW)に対応するための計画が主なテーマであった。第一日目の最初に、仙台天文同好会の会長である吉田正太郎氏が「彗星観測に適する光学系」と題する講演もされた。光学器械として見た眼球の話に始まり、各種の望遠鏡の光学系の解説がなされた。そして長い尾をもつ彗星を撮影するには広角よりむしろ魚眼レンズが適当ではないかなど、いろいろと有益な示唆が与えられた。

つづく研究発表で青野勇一氏はハレー彗星の公転周期の変化と木星の公転周期との関係について述べ、新井優氏は自作の全自動複天写真儀について報告した。佐藤寿治氏はオーストラリアでのハレー彗星観測計画について、また小石川正弘氏は仙台市天文台のハレー彗星の観測計画について述べた。仙台天文同好会の神山博氏らは、マイクロフォトメータの試体について報告した。高槻幸弘、中野圭一両氏は、1984年3月7日に撮影された彗星状の天体について報告し、次に関 勉氏が1月25、26の両日に撮影したハレー彗星の写真が披露された(代読)。

以上で第1日目を終り、夕食後、運営委員会が開かれ、懸案のIHWのレコーダーの件などが討論された。レコーダーの主な役目は、わが国のアマチュア彗星観測者とIHWの仲立ちをすることであり、そのとり組みについ



ては前回の会議(1984年、岡山)で提案され、ほぼ一年にわたって運営委員の間で検討されて来た。そして第2日目の最初の全体会議で、別掲のようにIHWに協力するため、わが国のレコーダーの選出が行われた。この全体会議につづいて、今回は眼視観測と写真観測のテーマにわかれて、2つの分科会が並行して行われた。眼視観測分科会では、わが国で行われている彗星の実視光度の観測がほとんど海外では知られていない点について、今後の改善の必要が指摘された。写真観測分科会では、前日に報告された新井 優氏の装置について、さらに詳しい説明が行われた。また富田弘一郎氏は彗星撮影用に作られたフィルターについて紹介し、中野圭一氏からは最新の彗星情報を早く入手することができるダイヤル・イン・コンピュータ・サービスについての説明があった。

以上が会議で発表されたことの概要であるが、北は北海道、南は福岡から140人を超える人々が集り、会議の合間には、今後の彗星観測についての個人的な情報交換や懇談が行われ、大へん有意義であったと思われる。特に今回は天気が良かったので、夜遅くまで仙台市天文台や、有志の観測所で協同観測が行われた。

今回は1986年2月8、9の両日、ちょうどハレー彗星が近日点を通る日に明石で開かれる予定である。彗星会議が、常に彗星の観測や研究を続けている人々により刺激となり、原動力となることを願いたいと思う。最後に、今回の仙台市天文台及び仙台天文同好会の方々のご援助とご協力に心からお礼を申し上げると共に、過去15回にわたり、この会議に協力して下さった方々に改めて感謝したいと思う。また本会会員諸氏の今後のご援助とご協力を特にお願ひする次第である。

* コンピューターコンサルタント(株) Ichiro Hasegawa:
The 15th Japanese Comet Conference